

< 幼児教育 >

幼児の言葉を豊かにするための援助のあり方

～ 児童文化財の活用を通して～

大山幼稚園教諭 仲松 由喜子

目 次

テーマ設定の理由	1
研究目標	1
研究仮説	1
研究の全体構想図	2
研究内容	
1 言葉とは何か	3
2 言葉が育つ環境	5
3 発達の過程と言葉の獲得	6
4 児童文化財について	7
5 教師の援助のあり方	8
検証保育	
1 学級の実態	10
2 教材観	10
3 保育観	11
4 本時までの活動の流れ	11
5 本日の生活の流れ	14
6 本時の流れ	14
7 検証保育研究会	15
仮説の検証	
1 具体仮説 の検証	16
2 具体仮説 の検証	18
研究の成果と今後の課題	
1 研究の成果	20
2 今後の課題	20
3 おわりに	20

< 主な参考文献 >

< 幼児教育 >

幼児の言葉を豊かにするための援助のあり方 ～ 児童文化財の活用を通して～

大山幼稚園教諭 仲松 由喜子

テーマ設定の理由

「幼稚園教育要領・平成 11 年 6 月・文部省」の領域「言葉」の「ねらい」において、(1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。(2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。(3) 日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。とある。「言葉」の領域に示されている話すこと、聞くこと、表現することは自分の思いを伝え、人と関わりをもつ楽しさを味わうことであり、コミュニケーション力を培うものであると考える。つまり、園生活の中で、遊びを通じて「生きる力」の基礎を培う幼稚園教育において、最も重要なことであると捉える。

これまで保育現場で関わってきた幼児を振り返ってみると、明るく活発で大勢の前で喜んで話すことができる積極的な子が多い反面、友達との関わりが苦手でうまく遊びに関われない子や、困っていても相手に自分の思いをどう伝えたらいいかわからずにいる子、また、集合などの場においては、人の話を聞く態度が身についていない子、などが見られた。

幼児が自分の思いや考えを言葉で表現したり、相手の話に耳を傾けようとしたりする態度を育むために、教師は、幼児の発達や内面を理解し、信頼関係を築いていく中で、豊かな言葉で接していくことが肝要であると考え。この相互に営まれる関係を基盤とし、人と人との直接的な言葉の遣り取りや、幼児の生活の場のあらゆる環境の工夫が必要である。

その一つとして挙げられるものが、子どもを取り巻く諸事象・諸事物である児童文化財である。児童文化財との関わりを通して、幼児自身が主体的に取り組み、言葉で表現したくなるようなイメージを創り出す経験や、感動や楽しさを共有し合ったり、共に考えたりする体験が可能となる。幼児の発達を促し、興味に即した絵本・紙芝居・素話・ペープサート等などの児童文化財の活用を、園生活の中で効果的に取り入れ、計画的な指導の工夫をしていくことで、幼児の言語活動は一層豊かなものになっていくと考えられる。

「人と話すことや聞くこと」が楽しいという豊かな言葉の育成は、とりもなおさず、人と関わり合う力の育成であり、心の育ちが期待される人間関係の基盤であると考え。

そこで、言葉を交わし、人と関わり合いを深めるために、幼児の最も興味のある「児童文化財」をどのように幼児に出会わせるかを工夫することで、豊かな言葉の育成につながるのではないかと考え、本テーマを設定した。

研究目標

豊かな言葉を育むために、児童文化財を通した指導・援助のあり方を探る。

仮説

1 基本仮説

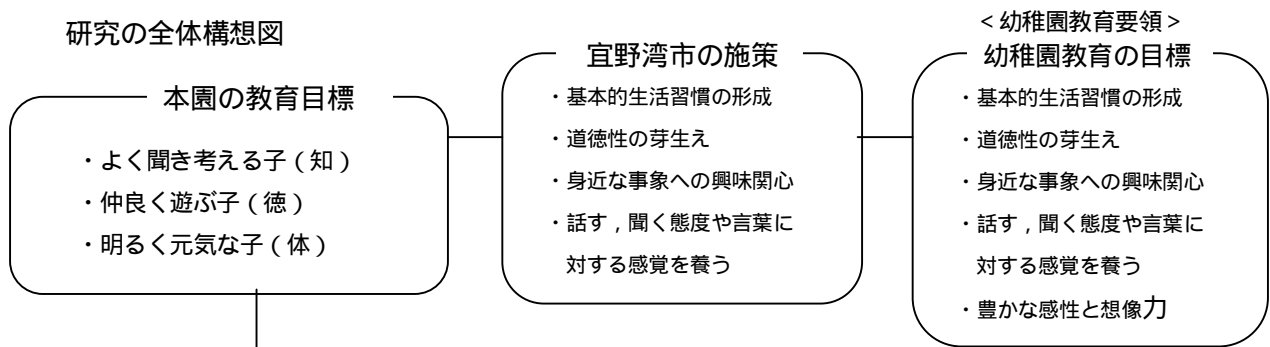
幼児の発達や内面を理解し、興味や関心に即した児童文化財を活用することにより、幼児の言葉を豊かにすることができるであろう。

(1) 具体仮説

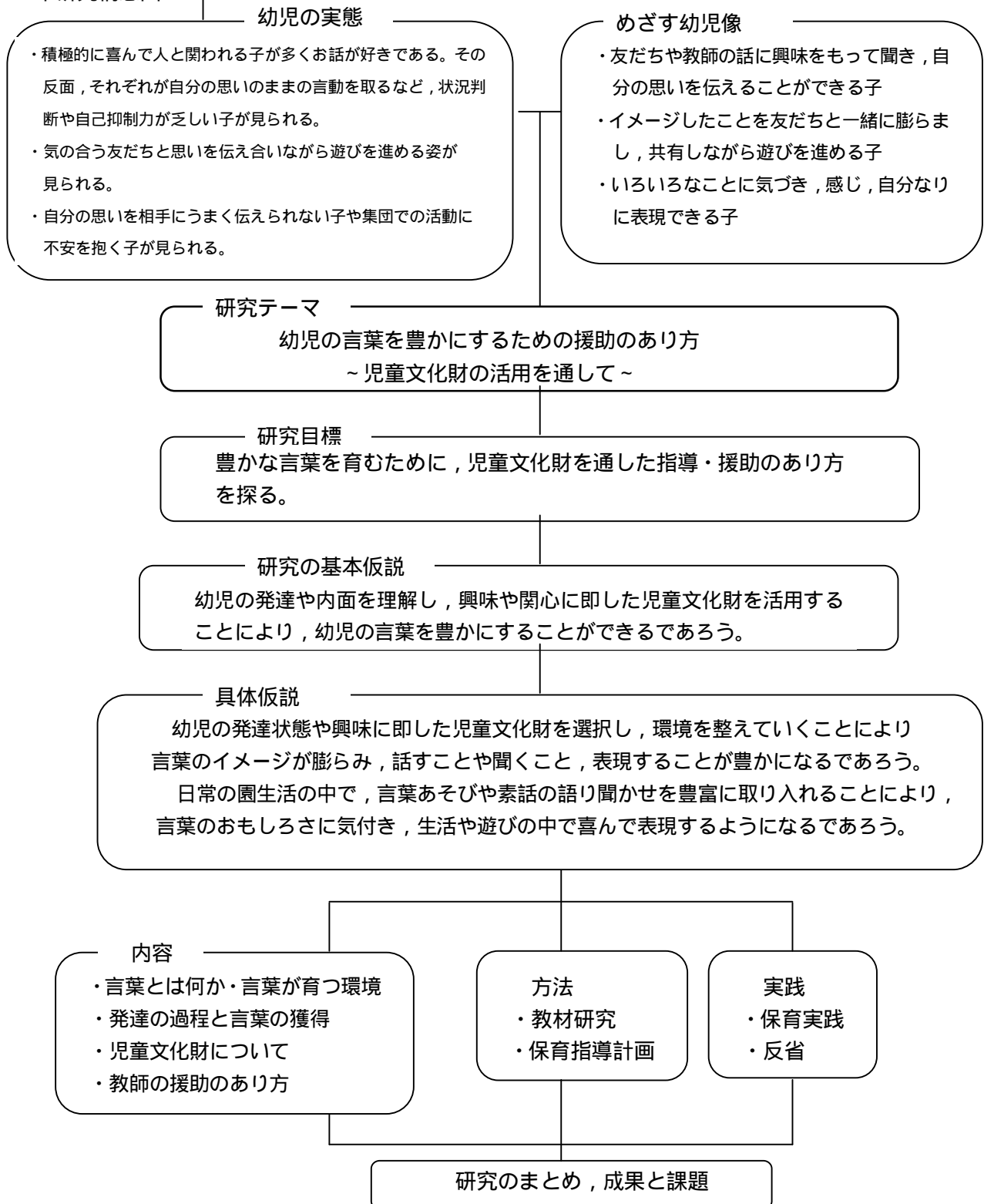
幼児の発達状態や興味に即した児童文化財を選択し、環境を整えていくことにより、言葉のイメージが膨らみ、話すことや聞くこと、表現することが豊かになるであろう。

日常の園生活の中で、言葉あそびや素話の語り聞かせを豊富に取り入れることにより、言葉のおもしろさに気付き、生活や遊びの中で喜んで表現するようになるであろう。

研究の全体構想図



本研究構想図



研究内容

1 言葉とは何か

(1) 幼児にとって豊かな言葉とは何か

言葉は、私たちの全生活の中で常に使われているものであり、言葉を通して、考えたり、人との遣り取りをしたりするためには不可欠なものである。アメリカの心理学者キャロルは、「言葉は心の内にあるものを外に表すコミュニケーション（伝達し合う）の機能と、自分宛てに外に表したものを自分が受け手になり（個人内における伝達）、思考や動作を助ける機能の二つをあげている」と述べている（詫摩武俊訳『言語と思考』）。

岡本夏木によると、「乳幼児期にことばを使い始めた子どもは、学童期、青年期を通してコミュニケーションや思考の具として、また美的表現の手段としてのことばを完成させてゆく。そのことによって、自分の外なる世界と内なる世界をつくりあげてゆく」とある。

言葉は、それぞれの育つ日常生活の中で、特に、情動の共有や共感ができる特定の人とのかかわりを通して、自然に話したり聞いたりする経験の中から、言葉の使い方や物事の捉え方、言葉に対する感覚が備わり、自分のものとなっていくと考えられる。

よって、幼児にとって生活の中で心が動かされ、心に響くような豊かなイメージを作り出す体験を重ねることが重要であり、その中で幼児が自分なりの言葉を使い安心して表現していくことが、豊かな言葉に結びつくと考えられる。そして、この言葉の豊かさとは、感情や考えを豊かに表現できることであり、心の豊かさの表れであると捉える。

(2) 言葉の機能

言葉を獲得することによって幼児が身につく力を、横山（1994）によるものを参照に以下のようにまとめた。

表1 言葉の機能（『保育内容 言葉』参照）

コミュニケーションの手段 言葉を獲得することで、他者と言葉で伝え合うという能力を獲得する。欲求・要求・感情・考え・経験や知識を相手に伝え、反対に他者のそれらを理解する能力を獲得する。このようにして、社会性を促す機会を得ていく。	認知の手段 物に言葉で名称がつくことによって、弁別ができる。命名化されることで、区別して理解したり、考えたりできる。言葉なしに、何かを知ること、理解すること、考えることは困難なことである。
行動をコントロールする手段 言葉は行動を支え、コントロールする働きをもっている。 例 幼児が自ら「コワクナイ、コワクナイ」と言いながら自分自身の言葉で自分の行動をコントロールするようなこと。	自己表現の手段 コミュニケーションとして人に伝えるという行為であるとともに自分の思いや要求を表現すること。

上記の4つに加え、小田ら(2004)は「自我の形成と言葉」を表している。

自我の形成と言葉

これまでの4つを統合したとき、「私が私である」という自我の形成に言葉が中心的な役割を果たしている。コミュニケーションの能力に、認知能力が加わり、自分の行動をコントロールする能力が行動の幅を広げ、そのような過程で得た様々な知識や感情が他者とのコミュニケーションで交換されるとき自我・アイデンティティーが形成される。

ここで、言葉の機能で最も重要な コミュニケーションの手段について前原(2006)によると、コミュニケーションは、common(=共有の)から common 化する(=共有化)という意味を含み、相手と自分が同時に同じものをもつことと捉えられる。よって、ことばで表現された内容は、本来話し手の所有していたものであり、それが聞き手に理解されたとき、聞き手の所有するものとなる。その会話によって音声表現された情報や知識は、2人が同時に持つようになり、共有された形となる。これを可能にするのが「言葉」であり、言葉によってコミュニケーションを可能とするといえる。

(3) 幼稚園教育要領「言葉」の捉え

幼稚園教育要領「言葉」に関する目標

日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり、聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること。

ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

領域「言葉」では、自分の思ったことや感じたことを相手に伝えるという表現への意欲や他人の言葉を興味や関心をもって聞く態度を育て、様々な言葉に接することでそれに対する感覚を養うということが示されている。この領域について、小田(2004)は、「子どもが日常生活の中で自らの思いや考えを使って伝える姿を充実させていく方向を強調しており、つまり、この領域では、生活の言葉を育てることである」と述べている。

子どもの生活は、体験を基盤とした遊びを中核として成り立っており、その中で、子ども自らが獲得していく言葉や、生活していくために必要な言葉、子どもが意味づける生きた言葉を育てていくことが重要だと考える。

内容では、相手の気持ちを思いやったり、自分でもわかるように話そうとしたりする気持ちを大切にすること、また、において、幼児は生活の中で繰り返し経験したり、絵本や物語などの児童文化財に出会ったりしていくことで、様々なイメージを膨らませながら、言葉を豊かにしていくことを示している。

領域「言葉」では、幼稚園の生活の流れの中で、いろいろな場でいろいろな経験を重ねることにより、自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉にも耳を傾けようとする態度を育み、言葉に対するイメージを膨らませていくことが大切であると考えられる。

(4) 他領域との関わり

幼稚園の一日の生活は、遊びや活動を通して心地よい生活リズムの連続性の中にある。

この園生活全体を通して幼児は、友だちや教師と関わりながら様々な体験を重ね、心身の発達に必要な力を総合的に身につけていく。

言葉の獲得においても、「幼児がそこにある環境に関わって遊んでいる中で友だちと共に言葉を交わしながら、さらにあそびを展開していく」という普段、何気なく見られる場面から考えても、「言葉」それだけが単独に育つのではない。

五つの領域（心身の健康に関する領域「健康」・人のかかわりに関する領域「人間関係」・身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」・言葉の獲得に関する領域「言葉」・感性と表現に関する領域「表現」）が相互につながり合う総合性が言葉を育てるのである。

幼稚園教育要領「言葉」内容（抜粋）

人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す

生活の中で必要な言葉が分かり、使う

親しみを持って日常のあいさつをする

生活の中で言葉の楽しさや美しさに気づく
いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする

絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう

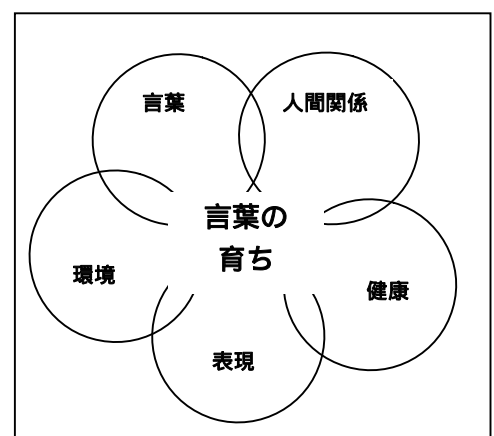


図1 総合性・連続性をもった幼稚園生活

2 言葉が育つ環境

岡崎(2006)は、「言葉は生活経験や環境、精神発達や社会性の発達などのさまざまなものの影響を受け、個人差の著しいものである」と述べている。それぞれの環境で育った子ども達が、日常の園生活の中で、友だちと遊ぶ、散歩に行く、動植物を育てる、製作活動をするなどの共感体験もひとつの環境をなし、これらを通して言葉の経験をさらに豊かなものにしていく。

(1) 子どもの生活と言葉

言葉は、子どもが日常生活の中で、さまざまな感情や要求、意思を表し、生活そのものに適応していく過程の中で獲得され、子どもたちの生活そのものを豊かにしていく。岡本(2005)は、幼児期を「生活のことば化」の時期であるとし、その時期は「ことばが生活の中での中心的な手段となり、またそれによって生活経験がことばによって再構築されるとともに、ことばの意味が生活の中により深く根を下ろしていく過程」であると述べている。つまり、幼児期には、子どもが自分の生活を言葉によって表現するようになり、生活がうまく言葉化されるようになる時期であると考えられる。

また、言葉は、生活の中での自分の経験や考えたことを表現しようとする必要性の中で育つ。そのためには、表現したいという思いが内面に備わっていることが必要である。戸田(2005)は、「表現することの喜びのひとつは、自分の中にわき上がってくる感情を言葉に表すことでそれが相手に伝わることであり、もし、表現したくなるような豊かな感情が育っていなければ、その喜びを味わうことはできない」と述べている。

このようなことから、幼児期は、生活の中のあらゆる体験の中で感情が育まれ、言葉が育つと考える。幼児が主体的に言葉を獲得するためには、言葉の表現の元となる豊かな経験や感動体験ができる環境、自分の思いを受け止めてくれ、言葉を交わし合える人的環境などが、幼児の生活には不可欠といえる。

(2) 人的環境と言葉

幼児にとって、生活の場において周囲の人と関わることで言葉の発達を促す。そこで、園生活を営む中で、幼児が周囲のどのような人とどのように関わるかを、高杉ら(2006)の説明をもとにまとめる。

表2 言葉が育つための環境的条件（『保育内容「言葉」』参照）

心の拠り所となる教師の存在	園生活の中で、最も身近な大人の存在が教師であり、情緒的つながり（愛着関係）が安定している状態にあることが言葉の発達につながる。
体験を共有し言葉化してくれる教師の存在	幼児には、言葉で適切に表現ができなかったり、言葉の習得がなされていない名称などがある。教師がそれを受け止め、その実体や内面的な表現を言葉として伝えていく。
さまざまなことばを必要とする集団生活	集団生活では、お互いが気持ちよく生活していくために必要な言葉がたくさんある。幼児が、園生活の中で使われる様々な名称を覚え、友だちや教師との関わりを通してその言葉と意味を理解して自分で用いるようになっていく。
言葉を豊かにする人的環境としての遊び仲間存在	園生活の中で、友だちが使う言葉・仲間と一緒に使ったから使って楽しい言葉・ごっこ遊びの中で役になりきって使う言葉などたくさんの言葉やその使い方を覚えていく。友だちは、言葉を獲得するための大事な環境である。
言葉の環境としての児童文化との出会い	幼児期にあらゆる児童文化財に出会ったことが大人になった時にも幅広い教養として蓄積され、様々な人と言葉や文化の共有につながる。また、聴くことの積み重ねは、物事を理解することにつながっていく。

(3) 感動体験のできる環境

獲得した言葉をさらに豊かな言葉へとするために、園生活において、どのような環境を施すことが望ましいかを、引き続き高杉(2006)よりまとめる。

表3 言葉を豊かにするための環境的条件（『保育内容 「言葉」』参照）

様々な人々と 出会う機会	園生活を通して、多様な他者と出会う（友だち、教師、保護者や行事等に関わる特別関係者、外来者など、）相手の年齢や自分との関係、相手との親しさやその状況によって、言葉の表現の仕方を変えていく必要性を学ぶ。
様々な行事や 出来事との出会い	園で取り組む行事は、意図的なものであり、それは、日常の生活に変化と潤いを生み出す。行事を通して、偶発的な出来事に遭遇することもあり、その体験した感動を友だちや家族との話題にしていく。生活に必要な言葉は、その言葉を必要とする生活の中での出来事を通して具体的に学ばれていく。
状況に応じた 文脈的な言葉の 使い方と出会い	幼児は、教師や身近な大人との会話を通して、文脈的な言葉の使い方を覚えていく。「もし～したら」という仮定的な文脈や、条件や約束事など、状況に応じた文脈的な言葉の使用を理解し、自分の言葉として使うようになっていく。
体験を言葉化する 機会	園生活を営んでいく中で、自分の経験や欲求などを相手に分かってもらえるように言葉化して表現する必要性が生じる。これは、幼児がすぐにできることではないので、話しやすいよう教師が言葉で誘導したり、友だちが話すことを真似たりしながら自分なりに相手に伝えられるようになっていく。
言葉遊びを通して 言葉の面白さを 学ぶ機会	言葉には、リズムや響き、動きや意味などを楽しませる働きがある。言葉遊びは、しりとりにやカルタを元祖とし、手遊び、わらべ歌遊びなどが子ども達に楽しめるものである。みんなで言葉遊びを楽しみながら、言葉のおもしろさを知り、様々な言葉が使えるようになっていく。
友だちや教師との おしゃべりを通して	4歳児を過ぎるころから、言葉を自由に操られるようになり（他弁期）、友だちと言葉を積極的に交わすことが楽しくなる。これは、友だちの話を聞きながら、自分の話していることを第三者的に理解できることができ、おしゃべりが可能となる。
文字文化に接する 機会	幼児の生活は、文字に囲まれており、早くから文字が生活の中で果たす様々な機能に接する。文字の読み書きができるということは、言葉の構造を理解できるようになること、自分の言いたいことが整理することができるようになることがいえる。

3 発達の過程と言葉の獲得

言葉の発達は、乳幼児期に最も大きな変化が見られる。出生して5年間で、言葉を巧みに使いこなす幼児が、乳児期からどのような経過を辿り、今ある言葉を獲得してきたか、発達段階を理解することは重要なことである。

表4 乳幼児期の言葉の発達（『子どもと言葉』『保育内容 言葉第2版』参照）

初語のころまで	一語発話のころ	二語発話のころ	2歳児前後
・生後1ヶ月前後からクーイングが聞かれ、2ヶ月前後から喃語が現れる。 ・6ヶ月頃までには特定の人とのコミュニケーションができ、人見知り行動も現れる。 ・8ヶ月近くになると親しい人への語りかけや慣れた場面での言葉に理解反応がみられる。	・1歳前後に初語が現れる。それと前後して指差し行動が始まる。 ・音声や動作の模倣、人とのやり取りを楽しむ。 ・象徴機能の芽生えであるフリ表現が出てくる。	・1歳半から2歳の間に2語発話が始まる。 ・助詞の種類が増える。幼児語や幼児音が多い。	・「コレナーニ？」とさかんに質問するようになる。 ・語彙数が急増し、2歳までには、ほとんどの品詞を使う。
3歳のころ	4～6歳のころ		6歳以降
・発音面も安定し、声の大きさの調節が可能。	・4歳近くになると、過去・現在・未来の一連の出来事を時間的に順序だてて話すことができる。		・言葉による思考が活発になる。

・言葉の使用が活発になるに伴い，使い方の間違いや自分勝手な新語もよくある ・自分の言葉で自分の行動を調整できる。	・人の発話や語の意味的理解も進み，言葉を使った生活が定着する。 ・4歳を過ぎると構音は上達し，6歳になるころには幼児音はほとんどなくなる。 ・文字に関心を示し，ひらがなの読み書きができる。	・話し合いができるようになる ・言葉による行動調整機能も発達する。 ・文字言語が生活の重要な部分をしめるようになる。
---	--	--

4 児童文化財について

(1) 児童文化財の教育的意義

『現代保育用語辞典』によると，「児童文化財」とは「子どもの成長のために大人や子ども自身，そして大人と子どもが協同して歴史的に，また社会的に作りだした，子どもに直接・間接影響を与える諸事象・諸事物を総称した概念である。広義では，子どもを取り巻く諸事象・諸事物すべてを指す。具体的には，玩具・遊具，遊び，書籍（絵本・児童文学等），お話等，マンガ，テレビ・ビデオ，ラジオ，紙芝居・パネルシアター等，児童劇・人形劇，映画，音楽，などがある」とある。

また，徳安(2005)によると，「幼児教育の中における児童文化財とは，子どもを取り巻く環境の有形・無形の内容であり，子どもの発達に正の方向性を与える可能性をもつものである」と述べている。子どもは園生活の中で，この児童文化財との関わりを通して，「教師との信頼関係を深め，安定した情緒の拠り所を獲得していく。また，友だちとの活動が生き生きとなり，そこに社会性が発達していく。豊かな想像力も，この児童文化財との出会いの中で培われる」と述べている。また，「遊びを通した生活の中での児童文化財との関わりは，感覚的発達や認識の発達，言葉に対する刺激を受けていく」とある。これらから考えると，児童文化財が幼児の発達や興味に即しているか，幼児がどう成長するかなど適時に効果的に活用するためにしっかりと吟味する必要がある。

児童文化財は，子どもの種々の発達に大きく貢献しており，幼児期においては，欠かすことのできないものであると考えられる。

徳安は，特に言葉とかかわりの深い児童文化財を下記のように分類している。

観たり聞いたり読んだりするもの・・・お話，絵本，紙芝居，人形劇
パネルシアター，ペープサート等
遊びの内容が文化財となるもの・・・劇遊び，言葉遊び等

人形劇，パネルシアター，ペープサートなどは，教師が演じるのを 観たり聞いたりする受容的活動が主であるが，幼児の興味や発達に応じて，環境を整えていくことで， の遊びの内容が文化財となるものの領域に入っていくことが考えられる。

(2) それぞれの特性

上記で挙げた児童文化財の特性について，加藤・古宇田・永野(2006)，徳安(2005)を参照にまとめてみる。

観たり聞いたり読んだりするもの

【お話】 お話には，絵や画面がないということが大きな特徴である。聞き手は，語り手の目や表情を見ながら聞き，語り手の思いやりや人格が反映し，お互いの絆が強まる。また，視覚的な制約がないことは，言葉に自然と集中してお話を楽しむことができたり，聞き言葉から自由にイメージを創り出したりすることができる。 お話には，快いリズムカルな言葉の繰り返しや韻律などが使われていることも多く，言葉のおもしろさや美しさに気づく機会となる。

【絵本】 絵本は、子どもが比較的早い時期から接する言葉と絵による文化財である。繰り返し見たり聞いたり読んだりすることで、想像力や表現力が養われ、語彙が豊かになる。子どもの発達に応じた絵本との関わり方があがるが、4～5歳には、理解力や想像力が増し、思考力もつく。また、知的好奇心も強くなり、絵本の選択にも個性ができてくる。「物語絵本」「知識絵本」「詩・童謡の絵本」など豊富に用意されている環境が望ましい。

【紙芝居】 画面が大きく一つ一つの絵が大きく描かれており、集団で作品を味わう楽しさを身につけることができる文化財である。伝えたいねらいと内容が明確に描写されており、聞き手は同じ気持ちを受け止めやすく構成されている。集約性に富んでいる。

【人形劇】 幼児は人形が大好きであり、普段の生活の中で幼児は、身近にある人形を自ら動かし、自分の感情や思いを言葉にのせて表現しながら関わりを楽しむ。

また、人形劇を観ることは、人形と演じている人の声、情景などからイメージを膨らませ、お話の世界に入り込むことができる。その中で、幼児は生き生きとした命を感じ、ワクワク、ドキドキ楽しみながら、人形と一体感を持ったり、自分と重ね合わせたりする経験ができる。

【パネルシアター】 絵に動きが見られ、幼児の好奇心が高まり、一段と興味が増す文化財である。対話形式で自然に語りかけながら進められる。話の途中で考えたり、応答したり、みんなで歌ったりすることで、幼児の積極性を引き出すことができる。パネルシアターは「見たりきいたりしていくうちに、興味や関心も高まり、集中力、観察力、想像力、話す力、考える力が生まれ、協調性・感受性なども生まれ、自らも話したい、演じたいという意欲も高まる」と古宇田(2006)は述べている。

【ペープサート】 歌や絵本、童話などをもとにしたり、イメージしたものをそのまま絵としたりして表現することができる。演じ手のオリジナリティを生かしながら楽しさを伝えることができ、教師と見ている子ども達が楽しさを共有できる文化財である。容易に製作することができるので、幼児が自分で作って遊ぶことができる。

遊びの内容が文化財となるもの

【劇遊び】 劇遊びは、絵本や紙芝居などが手がかりとなったり、普段のごっこ遊びが発展して劇遊びになったりする。加藤(2006)は、「劇ごっこは、子どもがいろいろな役を交代でやることにより、その役の立場に立って自ら考え行動し、発言していくので、その子なりの思考力や理解力、表現力を育てていく経験の場になる」と述べている。日常生活の中での様々な児童文化財との出会いの積み重ねが、感動体験や仲間との心の交流を生み出し、仲間が集まり、劇遊びへと発展させていく。劇遊びは、幼児の自発的活動として、保育活動の集大成として位置づけられるといえる。

【言葉遊び】 言葉遊びは、伝承遊びや手遊び、歌遊び、カード遊びなどを通して日々の生活の中で楽しむことができる。音のおもしろさや響きを楽しんだり、物の特徴である色や形を手がかりに言葉を集めて遊んだりすることで語彙を豊かにしていく遊びへとつながっていく。

5 教師の援助のあり方

幼児の言葉を育むためには、教師は言語環境として大きな役割を果たすといえる。だが、その根底として幼児との信頼関係を築いていくことが、言語環境において最も大切な役割であり、援助であると考えられる。

『幼稚園教育要領』においても、「幼稚園において、幼児が周囲の人々と言葉を交わすようになるためには、周囲の友だちや教師との間に安心して話せる雰囲気があることや気軽に言葉を交わすことができるような信頼関係が成立していくことが必要」とあり、このような基盤が成立していることにより、幼児は、次第に心を開き、自分の話を聞いてもらいたいという気持ちが生まれてくるといえる。

有賀(2006)を参照に幼児の言葉を育む教師の援助のあり方について、以下のようにまとめた。

表5 言葉を育むための教師の援助（『保育内容 「言葉」』参照）

よい聞き手	教師は、じっくりと子どもの心に向き合って話に耳を傾け、共感することが大事である。子どもの心を開き、安心して話すことができる雰囲気づくりに努めることも重要がある。
よい話し手	子どもの気持ちに寄り添った優しい語りかけ、励ましの語りかけなど場面に応じた語りかけにより、子どもの意欲がかきたえられる。教師の語りかけは、子どもの言葉を引き出し行動を起こすきっかけとなることが多い。
共に考える	「自分の考えを整理していくとき子どもは言葉を表に出すことによって物を考える傾向が強い」という。教師は、幼児が思考する時間をゆっくり待ったり、共に考えたりすること、また、幼児の行動や言葉から何を考えようとしているかを読み取り、言葉を補ったり、言い換えたりする援助が重要となる。このような援助によって、考える力となって生きてくるといえる。
経験の共有	教師は、子どもと経験を共有することにより、子どもの感動を受け止め、共感したり認めたり疑問を投げかけたりする言葉の交流を図ることができる。それにより、子どもはたくさんの言葉を使い、豊かな言語感覚を養ったり、言葉の意味を獲得していったりする。
(多様な経験ができるための)環境構成	経験の共有により、幼児はさらに自分のもつイメージを実現へ向けていく。そこで、子どもが起こす活動が多様な経験へと広がっていけるように環境構成に配慮していく必要がある。様々な経験ができる空間などを十分に確保することで、イメージが豊かになり友だちや教師との言葉の交流も活発になっていく。
文化財の伝承	自分に語りかけられる豊かな言葉を聞く体験を深く持つほど、温かなイメージや感情、心を感じ取ることができるようになる。また、文化財の言葉によって経験する言葉のリズム、響き、イメージの創造、そのおもしろさや快さといった感覚的なものを体得し、想像力や理解力を豊かに伸ばしていくことにつながる。

教師が豊かな文化財を読んだり演じたりして文化を伝承していく役割は大きいと考える。絵本などで表現された内容やその世界は、語り手(教師)が伝えてくれた言葉として子どもの心に刻まれていくものである。言葉のモデル環境としての語り手(教師)の留意点について、村田(2006)は表6のようにまとめている。

表6 語り手の留意点

- ・内容が難しすぎず、易しすぎず、子どもが理解できる言葉で話す
- ・話を聞かせる時間は対象となる子どもに合った時間にする
- ・聞かせる話を整理し、順序立てて話すようにする
- ・きれいな発音で、高すぎたり、低すぎたりしない適度な音声で話す
- ・話し上手であるとともに、聞き上手である

検証保育指導案

日時：平成19年7月19日（木）

学級：大山幼稚園3組

男児17名 女児16 計33名

教諭：仲松 由喜子

指導講師：大湾 由美子

1 学級の実態

【普段の生活や遊びの様子】

入園して3ヶ月が過ぎ、友だちや教師と共に生活を進めていく中で、言葉も活発に交わすようになってきた。気の合う友だちや小グループができ始め、自分たちで遊びを進めていく姿も見られるようになってきた。だが、自分から友だちに声をかけることができず、教師の傍で過ごす子も見られる。

また、生活や遊びを進める中で、自分なりの言葉で思いや気持ちを伝える姿が見られるが、まだ周りが見えず、自分のことを伝えることで必死になり、相手の思いを受け入れたり、相手の話を聞いたりしようとする子は少ない。

遊びの実態として、戸外では、水遊びやシャボン玉・色水作りをしながら、水の気持ちよさや作った感動を伝え合う様子が見られる。室内では、友だちと思いを共有しながら、イメージしたものを絵に描いたり製作したりし、それを違った遊びに発展させていく様子も見られる。このように、発想豊かな子ども達だが、遊びの進め方に個人差があり、一つの遊びが長続きしない様子も見られる。

【児童文化財への関心】

ほとんどの子が、お話や絵本などを好み、自分なりのイメージを膨らませ、夢中になって見たり、聞いたりする。人形とのはじめての出会いでは、喜んでいていたが、（動物の人形だったので）鳴き声を真似て話を聞く耳を持たなかったり、野次を飛ばしたりと、人形との関わりの楽しさを感じられない子が見られた。2回、3回と回を重ねていくうちに、どの子も人形に親しみをもち、興味を持って話を聞いたり、人形に話しかけたりする様子が見られてきた。ペープサートやパネルシアター、言葉遊びなどの児童文化財も同様に、関わりを重ねていく中で、それぞれの児童文化財の楽しさを感じ、幼児同士、言葉が飛び交うようになってきた。最近では、遊びの中で子ども自らが作ったもの（ペープサートや絵本）を、全体場で表現する姿が見られ、見る側も、友だちの表現活動に少しずつ興味を持ち始めている。

2 教材観

パネルシアターは対話形式で自然に語りかけながら進められる。観る側は、途中で考えたり、応答したり、みんなで歌ったりしながら楽しむことができる。幼児でも作ってみたいという意欲を持ち取り組める[作る—演じる]が可能な児童文化財である。

本日は、パネルシアター「だれの手」を行う。子ども達は、動物にとっても親しみをもち、これまで、素話や言葉遊び、表現遊びなどの中で子どものよく知っている動物を取り上げてきた。「だれの手」は、「きんぎょ」「きつね」「くま」「うさぎ」「ぶた」の五つの動物の手と顔を組み合わせ、歌にしてある作品である。最初に動物の手のパネルを出し「だれでしょね」とみんなで考えながら歌い、顔のパネルを出すクイズ遊びとなっている。

これまで、本教材を2回取り入れており、子ども達は親しみをもちている。前回は、「他にどんな動物がでてきてほしい？」という問いかけに「ぞう」「ライオン」「おばけ」等インパクトのある動物が挙げられた。そこで、教室にパネル台を設定し自由に遊べる環境を整えることで、友だち同士遊び始めたり、自ら動物を作りたいと、意欲的に取り組んだりする姿が見られ始めている。

本時では、子ども達が作った動物を紹介しながら、みんなでオリジナルの歌を作ることを試みる。中には、自分なりに考えて歌詞を作った子もあり、それを全体に広げ、みんなでイメージを

共有することができる。また、動物の特徴を考え、自分のイメージを言葉で表現しながら、みんなで楽しさを共有することができる。

遊びの中で、身近な動物やおばけの話、アニメキャラクターの絵を描き、お話を作って遊ぶ子も見られている。そこで、白紙一枚を折って、つなぎ絵本を作って提示すると、そこに自分なりのイメージを膨らませ、お話を作り、自分でつくったお話を全体で紹介したいという思いをもち始めている。様々な形による表現を通して、言葉のやりとりを楽しんだり、自分の思いやイメージを伝える喜びを味わったりできる。また、友だちが演じたり、紹介したりする場面を見ることで、自分も作ってみたい、表現してみたいという意欲につながると考える。

3 保育観

子ども達が、落ち着いた環境の中で遊びや生活を進めることを通して、生活に必要な言葉が育つようにしたいと考える。安定して遊びや活動に取り組み、自分たちの生活の場という意識が根付くような環境を、子どもと共に考え、整えた。徐々に落ち着きつつあるが、友だちと共に生活を営み、様々な経験ができるよう、子どもの動線に沿った環境づくりは、常に必要である。

子ども達は、これまで様々な児童文化財と出会い、触れ合いながら親しみをもち、自ら遊びに取り入れるようになってきた。また、言葉遊びや語り聞かせを通して、言葉のおもしろさを感じたり、自分なりの言葉で表現することを楽しんでいる様子も見られるようになってきた。教師中心となる受容的活動から子ども自ら取り組む活動へ促していきたいと考える。

本日は、パネルシアターで登場する動物を、自分なりのイメージを膨らませ、その動物に合った言葉を考えたり、子ども自らが作ったものを紹介したり、見たりすることが相互に楽しく営まれるような活動にしたい。

4 本時までの活動の流れ

流れ	日付	：活動のねらい ○：活動内容 ：幼児の姿や言葉（つぶやき）	*：教師の援助及び環境構成
教師との信頼関係を築く・児童文化財との	5/7 (月)	人形に慣れる ○人形との関わり (動物の)人形との初めての出会い。豚の鳴きまね(鼻音)が飛び交う。	*人形に親しみを持たせ、関わっていけるように初めての出会いを大切にする。
		【考察】初めての人形との出会いに舞い上がり、話を聞くという雰囲気にはなかった。人形の種類や人形の出し方を検討したい。	
	5/25 (金)	人形との関わり言葉のやりとりを楽しむ。 「僕のこと覚えていた？」との投げかけに「覚えていたよ」「待ってたよ」との声が聞こえる。 ○人形との関わりを通して(生活に関連した)素話を聞いたり、手遊びを楽しんだりする	*人形の出し方、誘い込むような話し方、声、トーンなどを意識し、次回にも期待が持てるように関わる。 *子どもの状態を把握し、話の内容が分かりやすく自分の生活を思い出すことができ、イメージしやすいように語りかけていく。
		【考察】人形の種類を検討するつもりであったが、前回の人形が多くの子にインパクトを与えたようで、待ち望んでいる様子もあり、再度同じ人形を使った。誘い込むように人形を登場させ、お話を始め、分かりやすくするように心がけた。子ども達は前回より落ち着いており、興味をもって人形の話の聞いたり、話しかけたりする様子があった。素話は、視覚的に訴えるものはないが、生活に関連した話の中に、子どもの名前を入れて話を進めていくと徐々に興味を持ち聞くようになった。	

出 会 い ・ 児 童 文 化 財 と の 関 わ り ・ 自 ら 取 り 組 む 活 動 へ	6/25 (月)	パネルシアターに親しむ ○ パネルシアター「お話しクイズ」を楽しむ。(桃太郎、一寸法師、猿蟹合戦、シンデレラ、あかずきんなどのクイズ形式) お話しクイズの歌の内容から、すぐに何のお話か連想できる子が多い。「この話、わかるよ」(あかずきんのパネルに対して)「狼がでてくるよ」「このお話、お遊戯会でやったことあるよ」などの声が聞こえた。 ○ ペープサートを紹介する。R男、K男、E子と教師が行うペープサートを見て自分なりの思いを抱く。「やってみたい」「おもしろそう」・・・	* 自然な流れの中で、パネルシアターに引き込まれるよう楽しい雰囲気づくりを心掛ける。 * お話しクイズの問題を出す「たぬき博士」を登場させスムーズにパネルシアターを始めていく。 * 演じる教師が一方通行にならず、子どもとの対話のやりとりができるよう意識しながら進める。 * ペープサートに親しみを持たせ、遊びの時間に作ったり、遊んだりできることを伝え、「作ってみたい」という期待をもたせる。
		【考察】クイズ形式のパネルシアターだったので、たくさんの声が飛び交った。こどもから出る言葉をたくさん予想していたら、子どもの言葉を生かし、さらに話を発展させることができたと思う。	
	6/26 (火)	○ 前日のペープサートの紹介を受け、遊びの時間早速、作り始める姿がある。全体の場で紹介したいという子にペープサートを演じてもらう。 教師「うさぎちゃん、こんにち。何して遊びましょうか？」 Y子「こんにち、かくれんぼしよう」 〃 「じゃんけんぽん！私の勝ち」 ：	* 子ども自ら、ペープサートを作り始めたので、作ったもので遊べるコーナーを整える。 * 全体の場での紹介では、子どもにとっても初めての経験なので、教師も一緒になってペープサートで演じ、楽しさを共有すると共に満足感を味わわせる。
		【考察】クラスにまだ溶け込めずにいたY子が進んでペープサートを紹介してくれた。絵や言葉の表現からも楽しさが見られた。今回がよいきっかけとなり、友だちと思いを伝え合うことの喜びを味わうようになっていってほしい。	
	7/3 (火)	(クイズ形式のパネルシアター) ヒントとなった言葉から自分の知っている動物を連想する。 ○ 子ども達が作ったペープサートを見ながら全員が揃うのを待つ ○ パネルシアター『だれの手』を見る。 教師「♪ぺったん、ぺったん黒い手」「ゴリラ」「ライオン」「おおかみ」などの声が聞こえる。 ○ 以下、5つの動物の手、ヒントとなる歌詞から自分の知っている動物を連想する。 教師「次はどんな動物がでてきてほしいかな？」 「ぞう」「とら」「おおかみ」「おばけ」など。	* 自然な流れでクラス活動に入るようにする。 * パネルの出し方や声のトーン、動作などを工夫し、何の動物なのか考えさせていく。 * 思い付きのまますぐ答えないで手を挙げて名前を呼ばれてから答えるよう習慣づけていく。 * はっきりとした言葉で歌い、子どもも一緒に歌えるよう引き込んでいく。 * 次回に向けて、楽しみが持てるよう期待を持たせる。

児童文化財との関わり ・ 自ら取り組む活動へ		【考察】ペープサートを演じる子ども達は、まだ自分たちで楽しんでいる段階なので、子どもに演じさせることに急がず、遊びの中で教師も一緒になり、楽しさを共有する時間をたくさん味わうことが必要だと思った。子どもに演じさせることを優先させたために、全体的に落ち着かない場面が目立ってしまった。 パネルシアターでは、言葉がたくさん飛び交ったが、今後はルールを作っていき、指名されて答えるようにしていきたい。「ゆらゆら」「黒い」「白い」などの言葉から様々な動物を考え、楽しむ様子が見られた。	
	7/9 (月)	言葉をヒントに自分なりに思考する楽しさを味わう ○ なぞなぞ遊びをする 教師「つめたくておいしい『そ』がつく甘いおかしはな～に？」 「アイスクリーム」「そうめん」「ソーダー」などの答えがどんどん出てくる。 S男「ソフトクリーム！」	* なぞなぞをよく知っている子、まだ理解できない子と様々だが、いろいろな言葉を考えて楽しむひと時が味わえるよう、人形や紙芝居を用いて関わっていく。 * 答えるときのルールを前もって確認をする。「分かった人は心の中で秘密にして手を挙げましょう」
		【考察】朝のひと時では人形によるなぞなぞ、帰りのひと時ではなぞなぞの紙芝居を聞き、言葉に対し興味を持ち、楽しむ場面が見られた。 これまで、活動の合間に鳴き声遊びやしりとりなどを行った。子ども達は、思った以上に言葉をよく知っているが、答えたいという思いが先走り、問題を聞き逃している子も見られた。子ども達はクイズ遊びなどが大好きなので「なぞなぞ」などを通して、しっかり聞いて、考えるという習慣を身につけていきたい。	
	7/10 (火)	興味を持って友だちの話を聞く。 ○ 今日の遊びについて話し合おう。 K男・T男「おばけの絵本を作りました」自分たちで話を始めていく。 E子・M子「お外でプール遊びして水が気持ちよかった」	* 人形を用いて進め、今日の戸外・室内遊びについて楽しかったことなどを話し合い、お互いの出来事を伝え合うひと時を作る。 * それぞれが、友だちの話を受け止め、自分の思いを抱き、明日への期待が持てるよう話す側、聞く側に関わっていく。
		【考察】それぞれの思いを伝え合える時間にしたいと思い、人形やペープサートを用いてお互いのその日の生活を振り返る時間を作った。友だちの話や作品の紹介に、身を乗り出して聞く姿が見られた。いつも、好きな遊びを見つけることのできないY男は楽しそうに遊んでいたの、話をするきっかけを作ると嬉しそうな表情が見られた。	
	7/12 (木)	パネルシアターを通して自分なりの表現を考える ○ パネルシアターに興味を持つT男,R男らがパネル作りや歌作りに取り組む ○ 全体の場でT男らの紹介をし、みんなでパネルシアター『だれの手』を見ながら歌う。 ○ 友だちの考えたを聞いたり、自分なりに考えたりしながら言葉のおもしろさを感じる。	* パネル台を準備し自由に遊べるような環境を準備しておく。 * 子どもの興味に応じて用具を準備する。 * 動物の特徴を思い出し、それぞれが言葉の表現について考えてみる。 * 特徴がなかなか思い浮かばない動物について、それぞれで考えるよう促しながら次回へつなげていく
		【考察】子ども達からリクエストのあった動物を教師が作ってきて提示するという考えであったが、子ども自ら「不思議な紙に自分たちでゆうれいをつくりたい」「歌も考えたよ」という言葉があり、任せていくことにした。作って直ぐ貼ってみたいという思いも受け入れ、その楽しさを十分に味わわせ、さらに全体に伝えていくことで、多くの子が興味を持ち始め、それぞれの動物を思い出しながら言葉を考えようとする姿が見られた。	

5 本日の生活の流れ（省略）

6 本時の流れ

活動名：「動物の特徴を考えて歌を作って表現しよう」

ねらい ・ 内容	- イメージを膨らませ、表現する楽しさを味わう。 - 思ったことや感じたことを話したり受け入れたりしながらイメージを共有する。 - 友だちや教師の話に興味を持ち、見たり聞いたりする。 - パネルシアターの絵から自分なりのイメージを持ち、絵に合った言葉を考える。
仮説	- パネルシアターの歌遊びを楽しむことを通して、言葉で表現したり、考えたりする楽しさを味わうことができるであろう。 - 夏休みと関連した素話を聞くことや人形との関わりを通して、自分なりのイメージを持ち、表現しようとする意欲へとつなげていくことができるであろう。
時間	○：予想される幼児の活動及び内容 教師の援助
9:00	○好きな遊びをする 室内遊び：友だちと思いを伝え合いながら遊ぶ - 身近な材料を使った製作やペープサートづくりをする - 作ったものを動かし、思いを伝え合いながらごっこ遊びを楽しむ。 - 絵カード遊び、絵描きなどをして遊ぶ 戸外遊び - せみ捕りやうさぎ等身近な生き物との関わり - 自分なりに工夫してシャボン玉遊びや色水作り * 友だちとイメージを共有し合って遊びを進めていけるよう必要な材料や用具を準備する。（画用紙、テープ類、割り箸、チラシ等） * 遊びの中で見られる子どものアイディアのよさを認めるとともに周りの子ども達にも知らせながら刺激になるようにしていく。 * 互いに思いを出し合って遊ぶ姿を見守ったり、さらに遊びが発展するよう遊びの様子を捉え助言をしたりする。また、遊びに必要な材料を加えたりしていく。 * 水や泡の感触などから気づきや発見を共感し、感動を伝え合いながら、さらに興味や関心が広がっていくよう関わっていく * 水分補給に気をつける。
9:30	○身のまわりを整える - 身のまわりを整え、うがい、手洗い、着替え等 * 進んで片づけている子を認め、周りに気づかせていく。 * 教師も一緒に片づけ、きれいになっている気持ちよさを味わわせる
10:00	○終業式、おやつ
11:00	○クラス活動 - 手遊びや言葉遊びなどをしながら、みんなが集まるのを待つ。 - 自分なりのイメージをもって教師の話聞く。 - みんなで楽しく歌いながら、パネルシアター『だれの手』を見る。 - 前回、登場してきた動物（金魚、きつね、くま、うさぎ、ぶた）を思い出しながら楽しく歌ったり表現したりする。 - 新しく登場した動物（ライオン、ぞうなど）について、どんな言葉で表現したらいいかを考える（動物の肌の色、特徴、鳴き声などから連想することが予想される） - 友だちの考えた歌詞の紹介を聞いたり、考えたりする - みんなで考えたオリジナルの歌を歌う - 人形との関わり（教師の話聞く） （夏休みへの楽しみや次回のお会いに期待をもつ） ~担任へ引き継ぐ * 事前にパネル台など必要な道具類を準備しておく。 * おやつのお片づけをし、気持ちよくクラス活動に入っていけるよう、子どもの様子に応じて手遊びや言葉遊びをしながら進めていく。 * 今日の出来事や子ども達の日常の様子から素話を語り聞かせ、イメージを共有したり、ストーリーを分かち合うひと時とする。 * 話し方においては、子どもの様子を考慮し、長くなりすぎず興味を持たせるよう心がける。 * （前回、見た経験をもつパネルシアターなので）やってみたいという積極的な子どもの思いには応え、援助しながら子どもに任せていく。指名されなかった子への配慮をする。 * 動物の特徴をイメージし自分なりの言葉や身体での表現を認める * それぞれの動物にあったオリジナルの表現を考えた子を紹介しながら、表現することの楽しさを味わわせるとともに、一人一人の表現やつぶやきを丁寧に受け止めていく * 友だちの表現を聞いたり、受け入れたりできるよう促していく。 * 友だちと声を合わせて言葉を掛け合ったり、歌ったりする楽しさや気持ちよさを教師も共有する * 必要に応じて素話を入れながら充実した時間が過ごせるようにする。 * 楽しかった余韻を残し、楽しい夏休みが過ごせるようそれぞれの思いを受け止めていく。
11:40	

7 検証保育研究会

(1) 保育者の反省

本時は、変則的な時間帯の中ではあったが、子ども達は意欲的であり、たくさんの言葉が交わされており、改めて子どもの力の凄さを感じた。

本活動を通して、それぞれが自分なりのイメージを描いて、言葉や表情、身振りなどによって表現されていた。一つの活動に取り組む中で、それぞれが言葉で表現したり、考えたりする楽しさを味わうことができたと思う。

これまで、子ども達は自分なりのイメージを膨らませパネルシアターやお話作りなどの活動に自発的に取り組み、本研究のねらいに沿った活動になってきていた。だが、本時では、教師主導で取り組んだために、子どもの思いや言動を汲み取る柔軟な対応が困難だった。

朝の遊びの時間から子ども達が、ペープサートや絵本作りを行っていた。全体の場で紹介したかったが、本時の流れをを意識しすぎて、子どもの作品を取り上げたり、子どもの思いを表現させたりすることが十分ではなかった。

(2) 意見及び感想

指導案に教師の思いや願いが入っており、それが伝わった。

本日の活動に向けてのこれまでの取組が指導案からよくうかがえた。

子ども達は楽しんでいて。そこで、自分の思いや考えを伝えようとする子ども達に対し、もっと認めてあげたり、褒めてあげたりする対応がほしいと感じた。

子どもが考えたり作ったりしたものを全体に紹介し、歌詞を確認する時は、教師の出番がほしかった。

子どもが作ったオリジナルのパネルや歌詞はとてもいいので、今回で終わらず今後も活用して、子どもとの言葉のやりとりを広げていってほしい。

今回の活動である『だれの手』の歌詞をみんなで覚えていくことがよい。

パネルシアターの活動中に中断してしまう行為は、子どものイメージを閉じてしまうことにつながり、よくない。

(3) 指導助言（沖縄キリスト教短期大学非常勤講師 大湾由美子）

本時のねらいは達成されていると思う。子ども達は、楽しそうで言葉がよく聞こえた。

子ども達の豊かな発想がうかがえた。例えば、「ゆうれい」のパネルから「ゆらゆら透明の手」などとても子どもらしい表現である。それを、もっと取り入れて子どもの表現を認めたり、褒めたりする対応が望まれる。

子どもを指名するときは、なぜこの子にあてたか、みんなが納得するような説明をしっかりとすること。（→「H男さんは、1学期の間でお話を聞くことがとても上手になったよ」など）

本日の日程は細切れであったが、その時の子どもの状況に応じて臨機応変な対応が大切である。

手遊びをアレンジして、子どもの生活の部分から広げていっているのはよかった。

手遊びやお話は、しっかりと必要感をもって行うこと。

活動の終わりに、それぞれの子ども達が今日行ったことを話し合ったり、確認し合ったりする場面が必要である。

本時の活動は、子ども達の様子や本日の流れから考えると長すぎた。

今後、活動中での子ども達の声の調整をすること。それから、どこを子どもに任せ、どこを教師が行うかをわきまえることなどを意識して保育を行ってほしい。

仮説の検証

1 具体仮説(1)の検証

幼児の発達状態や興味に即した児童文化財を選択し、環境を整えていくことにより、言葉のイメージが膨らみ、話すことや聞くこと、表現することが豊かになるであろう。

これまでの保育の中から実践事例を挙げて具体仮説(1)を検証していく。

(ア)【「絵本つくったよ」】

お話大好きなT男は、絵本作りに夢中になっている。片付けの時間となり、終わらないといけない焦りと最後まで作り上げたいという思いがあるようなので、完成するまで待つことにする。

T男：「オレさ、あんまり字書けないから、不思議なお話になったよ。」

透明だよ。みんなには見えない字、書いたんだよ」

子ども達が集まったとき、T男の「手作り絵本」を紹介する。

T男：「みんなには見えないと思うけど、オレには見える透明な字の

絵本だよ」とT男は、嬉しそうに自分の言葉で説明をした。

これまで全体の場で友だちの話聞く機会はなかったので子ども達は、T男が作った絵本に釘付けとなっていた。「透明な字、オレも見えた」という声が聞こえてきた。



この斜めの線の間に透明の字があるんだよ！

(イ)【うさぎさんのお話】

気の合う友だちとの関わりよりも、自分の興味のあるものに集中して遊ぶS子は、うさぎのぬいぐるみを持ち、語りかけながら遊ぶようになった。うさぎは、園で飼っているのも身近に感じ、本人のお気に入りの動物だとうかがえる。ペープサートや絵本にもうさぎを描く様子が見られた。

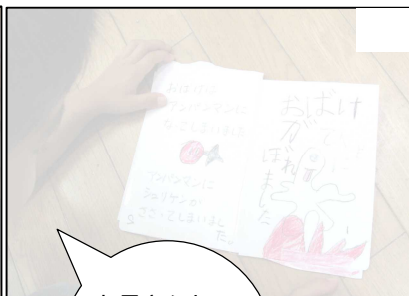
S子の絵本より

うさぎさんのおともだちがふたりあそんでいました。あそんでいると、けんかをしてしまいました。だけど、あとからなかよくなりました。ふたりはおうちに帰りました。

(ウ)【写真による事例】



ぼくたちも
絵本、作ったよ



お母さんと
おばけの絵本
作ったよ



図鑑で調べたり、折り紙の折り方を
自分たちで教え合ったり・・・

一人で思い思いに絵描きを楽しむM子は、自分の作ったペープサートに思いをのせて友だちと言葉を交わす楽しさを味わうようになった。

「ねえ、あそびましょう！」

「今日は何してあそぼうか？」



～人形との関わり～

最初は、野次を飛ばしたりする子もいたが、
徐々に親しみをもち、関わるようになった。
「ぶうちゃんは幼稚園生になりたいんだって！
ぼくたちは、ぶうちゃんにしりとりも教えました」



(エ)【 パネルシアター『だれの手』への取り組み (No 1) 】

T :「♪ ひらひら ひらひら赤い手～だれでしょね」 何名かが「きんぎょ」と言う。
T :「♪ ペったん ペったん黒い手～だれでしょね」 「ごりら」「うし」「おおかみ」「くま」・・・
T :「♪ ぴょんぴょん ぴょんぴょん白い手～だれでしょね」 一斉に「うさぎ！」と返ってきた。

5つの動物のパネルを数回繰り返す。子ども達が、自信を持ち答える様子が見られた。

次に歌詞の中にはない新しいパネル(かに)を出す。

T :「かにさんも出てきたよ。一緒に歌、作ってみようか。かにさんってどんな動物だったかな・・・？」

K男:「わかった!『♪ ちょきちょき ちょきちょき赤い手』」

T男:「『♪ ちょきちょき ちょきちょきはさみの手』がいいよ」

T :「なるほど。よく見てるね、そのあとはどんな歌にしようか」

K男:「♪ あかいおめめはだれでしょね」

R子:「♪ きょろきょろおめめはだれでしょね」

何名かで声を揃えて「♪ かわいいおかおのかにさん」「できた!」

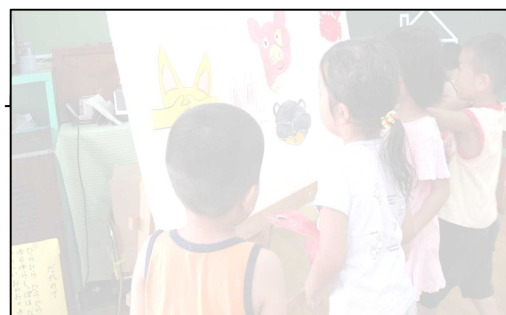
K男:「かにってかわいくないんじゃない?」

M子:「かわいいよ。海で見たよ」

T :「では、みんなが考えた歌、歌ってみようね」

子ども達も口ずさみながら楽しく歌う様子が見られた。

「他にどんな動物がでてきてほしいかな?」という教師の問いかけに「ライオン」「おおかみ」「ぞう」「ごりら」「きりん」「ゆうれい」・・・などが挙げられた。



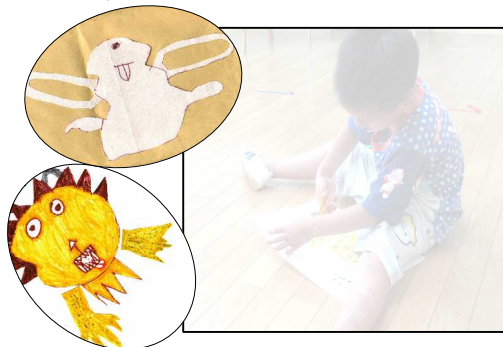
(オ)【 不思議な紙 ～ 『だれの手』より (No 2) 】

子ども達がパネルに触れ、言葉を交わしたり歌ったりしながら遊びを進めていけるよう環境を整えた。パネルを貼って繰り返し遊ぶ中で、不織布に興味を持つようになった。折り紙や画用紙はパネル台にくっつかない。不織布の性質に驚き「不思議な紙」と名づける。

K男:「あの不思議な紙でゆうれい作りたい!」

「俺はライオンを作りたい!」「きりん」「ぞう」・・・と、
子ども達によるパネル作りが見られた。

K男:「ライオンの歌、考えたよ。『♪ ガオガオ ガオガオ
黄色い手 ギザギザおひげはだれでしょね
こわい顔のライオンさん』ほら見て!
顔にギザギザおひげがいっぱいあるさあねえ」



(カ)【「おれも家で考えたよ」 ～ 『だれの手』より (No 3) 】

帰りの挨拶をし、クラスの子ども達は1階のホールに降りていく。H男は、いつも教室に残って、次回の準備をしたり、環境を見渡したりしている教師の傍に寄ってくる。

T :「H男さん、みんな下に降りたよ。もうすぐお母さんもお迎えにみえるよ」

H男:「あのお、おれさ、家で考えたよ。ぞうは『♪ どしどし どしどし大きい手』だよ。鼻も大きいし、
耳も大きいよ。おれ、考えたからわかるよ」

T :「H男さんの考えた歌、明日みんなに紹介しようよ」

H男は、はにかみ笑顔でホールに降りていった。

【具体仮説(1)の検証まとめ】

保育実践当初は、主に絵本や紙芝居の読み聞かせ、人形との関わりを通して、子ども達にお話の楽しさを味わわすことを意識してきた。もともと発想豊かな子ども達で、T男の絵本作りをきっかけに自ら取り組む活動が生まれてきた。「手作り絵本」は、どの子も字はなく、絵だけで表現されているものを作っており、全体の場で紹介するときは、自分の言葉で話を進めていく様子が見られた。

また、身近な動物やインパクトのある動物が登場すると、身を乗り出して活動に参加するため、パネルシアターやペープサートでも、よく動物を用いて子どものイメージを引き出しすことを試みた。友だちの言葉から気づきが生まれ、自分なりに考えてみたりするなど、7月にはたくさんの子どもの言葉が聞こえるようになった。様々な児童文化財の関わりを通して、教師の真似をしたり、友だちの演じるのを見たりしながら、それぞれが表現する意欲につながったのではないかと思われる。

【検証保育の様子】

ギザギザおひげ
の
ライオンさん



2 具体仮説(2)の検証

日常の園生活の中で、言葉あそびや素話の語り聞かせを豊富に取り入れることにより、言葉のおもしろさに気づき、生活や遊びの中で喜んで表現するようになるであろう。

引き続き、保育実践の中からの事例を挙げて具体仮説(2)を検証していく。

(キ)【子どもには見えるんだよ！(遊びの場面より)】

朝の遊びの時間、楽しそうに戸外で走り回っているK男、S男、T男の3名。教師を見つけて自慢げな顔で走り寄ってきた。

K男：「先生、見て！これ熱いよ。爆弾だから！シュ〜」

秘密なことが大好きなK男らは、仲間同士でつくったイメージの世界の喜びを伝えたいようだ。

T :「えっ？爆弾？どこにあるの？先生には見えないよ」

S男・T男：「おれ達、見えるもんね - 」

T男の手のひらには、彼らがイメージしている爆弾がのっているようだ。

T男：「大人には透明にしか見えないけど、子どもには見えるんだよ」

T :「いいなあ・・・どんな爆弾なのかなあ」

K男：「紐がついていて、大人には透明にしか見えないライターで火つけたらシュ〜っていうわけ」

T :「先生は見えないけど、なんか熱くなってきたよ」

教師の言葉に益々、思いをいっぱいに描いて応える。3名は笑いながら遊びに戻っていった。

クラスでの集まりの場において、3名の遊びを紹介する。

T :「今日ね、K男さん、S男さん、T男さんから不思議なことを教えてもらったよ。大人には見えない爆弾を持ってたよ。だから、先生には見えないんだ。本当に子どもだけに見えるのかどうか、みんなにも聞きたかったんだ」

3名に前に出てきてもらう。T男は手のひらを広げ、「シュ〜」と爆弾を持っているのを演じている。

「見える！」「おれも見えた〜」という子ども達の声、見にくる子、触わりにくる子などの反応が見られた。

「大変、大変。みんなが火傷しちゃうよ」という教師の一言に、3名は「フ〜」と火を消す真似をした。

(ク)【「3文字しりとりって知ってる?」(言葉遊びより)】

降園前のひと時。保護者の迎えを待ちながら、子どもの自由な発想や話を聞くことができた。

T男:「ねえ、3文字しりとりって知ってる?おれが考えたんだよ。やろう」

クラスでしりとりを何度か行ったこともあり、大抵の子が理解している遊びである。T男は自分なりにしりとりのルールを考えたようだ。

T:「3文字しりとり?はじめて聞くけど、どんなもの?」

T男:「『うさぎ』とか3つの言葉でやるわけさあ。2つだったら負けだよ」

T:「へえ~, 3文字の言葉を考えなくちゃいけないルールなんだね。じゃあ,『た・ぬ・き』」

T男:「おれ番ね。『き・つ・ね』・・・」

T:「ね・ず・み」

T男:「『み・か・ん!』・・・あっ!『ん』がついたらだめだった・・・」

M子:「『み・み・ず』もあるよ」・「み・み・ず」

T:「『ず』がつく言葉かあ・・・。難しいなあ」

T男:「『ず』が分からなかったら『す』でもいいんだよ。点々とつたら『す』さあね」

T:「ありがたいルールですねえ。たすかったよ。『す・い・か』」

T男:「か・ら・す」

:

(ケ)【「台風がくるよ」(子ども同士の会話より)】

大型の台風4号が近づいており、子ども達も自然の変化に緊張と興奮が隠せない様子である。

I男:「今日、お母さんが台風のニュースみせてくれたよ」

T男:「ニュースの次で天気予報やってたよ。明日、波マークも出て大雨マークがかいてあったよ」

M子:「明日、台風で幼稚園休みと思うよ。お母さんが言ってたし」

K男:「だけど、台風は涼しいよ。でも、ないちで大雨いっぱい降って崖崩れがあったってよ」

T男:「大きい台風だからお庭のものの飛ばされないようにしないとね」

T:「T男さんも飛ばされるくらい大きな台風かもね、飛ばされちゃったらどうしようか?」

M子:「お母さん心配するよ」

T男:「じゃあ、夢の中で台風に飛ばされて会おうね」

Y子:「雲にのりた~い」

【具体仮説(2)の検証まとめ】

絵本やパネルシアターで登場したキャラクターをペープサートにし、言葉遊びに活かすなど、一つの児童文化財を、様々な場面の中で工夫して活用したり、子どもが手にとって遊べる所に設定したりすることで、子ども達は児童文化財により親しみをもち、言葉を楽しむようになった。

また、子どもが興味を持ち話が聞けるよう「魔法の砂をかけましょう。かかったら先生のお話が聞きたくなりますよ」「お話座布団に座るとお話が始まります」など教師自身が言葉を楽しんだり、話す前に和やかな雰囲気作りに心がけたりした。

このような関わりなどもあり、普段の生活や遊びの場面で、子どもらしい豊かな発想や自分たちでイメージを共有しながら言葉のやりとりを楽しむ姿が見られるようになってきた(事例 ,)。また、身近な事象に興味を持ち、様々なことを感じていることがうかがえた(事例)。それらの言葉を拾い、違う言葉で返したり、想像を膨らませるような言葉をかけたりすることで、子どもの言葉はさらに活発になったように思う。

これらのことより、普段の生活の場面で教師や友だちの話しかける言葉に触れたりする経験や、表現したいという意欲を受け止めてもらい、共感してもらった経験を通して、自分の思いを言葉にして伝える喜びを感じる様子が見られるようになった。"

研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 子どもの興味や発達に即した児童文化財との出会いを通して、受容的活動から子ども自らが取り組む活動が見られるようになってきた。児童文化財を媒介とすることで、自分なりの思いや考えを言葉にのせて表現することを楽しむようになった。
- (2) 子どもの言動に意識しながらじっくり関わることで教師との相互作用が生じた。子どもは模倣や思考、友だちとの関わりの中から生活に必要な言葉を獲得していることがわかった。
- (3) 「言葉」に視点を置いた研究であったが、一つの活動から様々な活動に広がりを見せ、他領域との関わりも深く、「言葉」は総合的に育っていくものであるという幼稚園教育の奥深さを実感し、今後につながる研究となった。

2 今後の課題

- (1) 本研究では、特に人形との関わりやパネルシアター、ペープサート等の児童文化財を通して言葉を育てることを実践してきた。今後はさらに、様々な児童文化財の活用を広げていく。
- (2) 様々な児童文化財との関わりを通して、個人、小グループで言葉を交わして楽しむ姿が見られてきた。今後、子ども同士がお互いを受け入れ合いながら主体性をもって展開していけるよう集団としての育ちを育む。
- (3) 子どもの興味や意欲を引き出し豊かな言葉を育むため、教師自身の正しい言葉やイメージ豊かな言葉かけの工夫や援助のあり方を考える。
- (4) 言葉が育つ場面はコミュニケーションの場そのものが言葉の発達になると考えられる。よって、幼児の興味、関心と環境構成を含めた一日の流れのあり方を考える。

3 おわりに

本研究において、幼児にとって「言葉」とは何なのかということを、理論の面から、そして保育実践の面から、考え、学ぶことができました。恵まれた環境の中で、自分のペースで研究と向き合うことができ、これまでと違った視点から子ども達の姿が見えてきたと思います。

今回、このような研究の機会を与えて下さった宜野湾市教育長の普天間朝光先生、当研究所所長の長崎光義先生、大山幼稚園園長の瑞慶山良常先生、並びにご理解、ご協力をいただきました副園長の安里美佐子先生、そして大山幼稚園職員みなさまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、本研究を進めるにあたり、ご指導、ご助言をして下さいました沖縄キリスト教短期大学非常勤講師の大湾由美子先生には深く感謝申し上げます。研究の進め方など丁寧にご指導下さった当研究所研修係長の田場勝先生、ありがとうございました。

最後に、半年間共に支えあった同期研究員の垣田多美子先生、心優しいはごろも学習センターのみなさま、ありがとうございました。

< 主な参考文献 >

- | | | | |
|------------------|------------|---------|--------|
| ・高杉自子 柴崎正行 戸田雅美著 | 『保育内容「言葉」』 | ミネルヴァ書房 | 2006 年 |
| ・岡田明編著 | 『子どもと言葉』 | 萌文書林 | 2006 年 |
| ・小田豊 芦田宏 門田理世編著 | 『保育内容 言葉』 | 北大路書房 | 2004 年 |